

## 第2回 四万十市産業振興計画フォローアップ委員会 議事概要

- 日 時 : 平成28年3月30日(水) 14:00~17:00
- 場 所 : 四万十市役所本庁舎3階 防災対策室
- 出席者 : 委員27名中19名出席
- 協議事項 : 「四万十市産業振興計画の進捗状況」並びに「四万十市産業振興計画アクションプランの改定」について
- 配付資料 : 【資料1】 産業振興計画アクションプラン進捗管理シート【下半期】  
【資料2】 産業振興計画アクションプラン【平成28年3月改定版】  
【追加資料】 地方創生加速化交付金実施計画概要

### 1 開会

#### ・委員長挨拶

皆さんこんにちは。年度末押し迫った中での開催となりました。お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。年度末でいろいろな会議等が重なっているのではないかと拝察申し上げます。

そんな中、今週、高知県の産業振興計画のフォローアップ委員会が開催され、第3期、平成28年度からの産業振興計画について協議し、その内容が確定しました。この会議の中で色々話が出ておりましたが、有効求人倍率をご存知のとおり1を超えて、直近も確か1.05で維持されており非常に良い傾向になっている反面、深刻な人材不足というか人手不足の話が出ております。全国的な話であると同時に、業種によっては非常に深刻な状況になっています。こういった社会情勢が産業振興計画に与える影響は、当然大きくなると思えますし、恐らく「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の人口ビジョンと深く関わっていくということは、皆様ご想像のとおりだと思います。

今日これから、進捗と28年度のご議論いただくわけですが、是非、四万十市の各界代表の皆様が、ここで時間を共有しながら協議しますので、各御立場での課題をしっかりと出し合って、産業振興計画として直近で課題を克服、解決できるようなことについては、機動的にここに反映できるよう、色々な視点からご意見を賜ればと思います。限られた時間ではございますが、よろしく願いいたします。

### 2 協議事項

#### ・「四万十市産業振興計画の進捗状況」並びに「四万十市産業振興計画アクションプランの改定」について

事務局から【資料1】「四万十市産業振興計画アクションプラン進捗管理シート」、追加資料「地方創生加速化交付金実施計画概要」及び【資料2】「Ⅶ各分野の戦略・施策・アクションプラン」に基づき説明

#### 《主な質疑等》

(委員長)

ありがとうございました。資料1と2に基づき、説明をいただきました。今日いきなりご覧になられて細かい部分まで目を通すということは中々難しいと思いますが、地方創生加速化交付金の発表があって、基本は8千万円の上限ですので、四万十市としては最大加速化交付金も獲得ができ、その事業を中心にお話をいただきました。

これからの議論は、説明のあった部分はもちろん、それ以外の部分も含めてそれぞれの御立場からご意見、或いは何か不明な点があればご質問をいただきたいと思います。

(A委員)

国から四万十市に地方創生の金額は、平成28年度総額いくらですか。

(事務局)

地方創生関連で国が補助制度を設けたのは27年度からになります。その中で28年度は、総額で8千万円の交付金をいただいております。これは、加速化交付金と言いまして、国が28年度から進めて行く地方創生の前倒し的な交付金で、交付率は10分の10、100%です。四万十市としては3事業で8千万円の上限いっぱいとなっております。

それともう一つ、28年度の本格的な地方創生の動きに対しまして、地方創生の新型交付金という制度があります。これについては、国が制度化を詰めているところですが、地方で地域再生計画という計画を作ったうえで、その認定を受ければ改めて新型の交付金が受けられ、こちらは補助率が2分の1と聞いております。それについては今から四万十市として確保に動いて行きたいと思っております。

また、改めて説明いたしますが、27年度は地方創生関連で市としてかなり事業をいただいております。基礎交付と上乗せ交付金を含め、約8千万円の交付金をいただいております。例えば、観光のインバウンドの受け入れ体制整備、ぶしゅかんの産地化又はブランド化などに対して、交付金をいただいております。

(B委員)

漁業関連のお願いをしたいのですが、今一番深刻なのはエビです。私の地域では、手長エビが2種類いるということで、四万十の中でも目玉になる魚種なのですが、ここ数年皆無のような状態で原因も分からない。うちの漁協なりには調べているのですが、原因がわかっていないので、是非手を貸していただいて、原因を究明して繁殖できるようお願いしたいと思います。うなぎについては絶滅という中でも何とか今のところ保っています。

(事務局)

今、ご指摘があった件は、進捗管理シートの22ページになります。エビも含めて、内水面の資源回復は本市の最大のテーマのひとつです。その中でエビ資源は、計画策定段階からかなりご意見をいただいております。現在は、取り組み概要に書いていますが、県の水産振興課で資源量調査が行われています。そういったことも含めて、28年度どういった展開をしていくかという協議を始めたというお話は聞いております。そうした中で計画の段階からも出ていきましたが、エビは漁業権魚種ではないことがひとつあるだろうと。そうなれば一定の保護、例えば獲りすぎもあるだろうという中で、エビの一般漁業者、遊漁者の方を含めて、中々規制しづらい部分もあると聞いていますが、そういった部分に踏み込んで行くべきではない

かという意見はいただいています。ただ具体的に、こういった方策、例えば一定期間禁漁するとか、そういうところはまだ十分協議がなされていない状況だと認識しています。

(C委員)

県の水産振興課で、昨年エビの調査を西日本科学技術研究所に委託し実施しています。まだ結果はいただいていませんが、28年度は予算がないからできないと聞いています。一年くらい調査して結果がでるようなものでないから、是非計画してやっていただけるよう県にお願いしたいと思っていますが、県がやれないのであれば市で継続して調査できる方法をとってもらえたらと思っています。

(D委員)

27年度で県の調査は終わりということは聞いています。ただ、その先については、恐らく四万十川の周辺で、例えば民間機関の「山と魚の空間生態研究所」が調査していることもありますし、これまでも何箇所か四万十川流域で調査に入っていますので、そういったところと併せて考えていくのもひとつの手かなと思います。それと手長エビの場合、種苗を作って放流するということが技術的に無理なので、保護区域を一定作って、一般の方にも協力をお願いして、地元の方にも汗をかいていただくことが一定必要かなと思っているという段階です。

(委員長)

恐らく、特効薬的にこうしたらこうなるというのは中々見出せないとする、この状況を行政と市民がしっかり認識することから始まるのかもしれませんが。調査はもちろん必要であり、原因究明と対策と考えられる可能性に対して先手を打っておくことも大切ですので、漁業権の対象外となれば、一般的啓発は極めて重要になってくると思います。

いずれにせよ、非常に差し迫った重要な課題であること、今ご意見もいただき、県もこれまでの調査を手がけたという考え方から、今後についても当然考えていただけるでしょうし、市としてもアクションプランの中に入っていることなので、調査だけやって次の改善に繋がらなければ元も子もありません。一方で啓発して行くときの費用などを計上するのであれば、ここで市民運動に展開するとか、県全体であれば県民運動に展開するための広報的なさまざまな予算も考えていただいて、そこから手をつけていくということではないでしょうか。

もし、今四万十川流域の中で意識を変えることによって、資源に対して大きな変革があるとするれば、そういうふうに啓発をしていくのは非常に大きな効果があるのではないかと推測いたします。

(E委員)

西土佐ふるさと市さんのことですが、サテライトショップを松山市に開かれる計画になっていますが、場所はどのあたりで、どれくらいの規模で、どのような形でされるのかということをお聞きしたいです。

(委員長)

私も伺おうと思っていたのですが、もう一つ加えると、どういう経緯で松山に設置をするのかも加えてお答えいただけないでしょうか。

(事務局)

従来から西土佐地域では、愛媛県をひとつのターゲットとして、外商の取り組みをしています。そうした中でこれまでは、毎週2回、火曜日と金曜日に松山市で外商活動を行い、火曜日は松山市の大街道で朝市が開かれておりそこでの展開、金曜日は大街道の少し裏手になる場所ですが、店舗の一面をお借りして店舗形式での販売を行っていました。

その流れの中で、今回よって西土佐ができることも踏まえ、常設で店舗展開して行こうというお話を聞いております。

(F委員)

西土佐では10年くらい前から松山をエリアにして、西土佐外販部会が販売活動「地産外商」を行っています。売上も2万円から10万円くらいになり、経費は出ていました。

現在少し進化して、火曜日が大街道1丁目と3丁目の三越の前の2箇所、金曜日は1丁目だけで開いています。店舗の活用で地域の高齢者の方も寄ってくれるということもありましたが、今までのやり方では店舗が手薄になってきたので、そこをサテライトショップとして復活させることで、地域の産品を持っていくとか、道の駅への誘客とかをしようとしています。地域の学生達も関わりつつ店舗展開をする方向で考えています。

今から農産物の生産計画も立てていますので、農産物が増産されるはずで、道の駅だけでは消化しきれないだろうということも踏まえ、外商に転じて行こうとしています。店舗の面積は12畳くらいです。ただ、大街道から50mくらい外れていて、ちょっと立地条件は悪いのですが、地域をアピールする方法によっては、人がよってくれるのではないかと思います。道の駅とサテライトショップでの相乗効果を狙ってのことです。

(E委員)

イメージがわかりましたが、四万十市のアンテナショップとは、ちょっと違うということでしょうか。

(F委員)

いえ、当然四万十市のアンテナショップになって行くと思います。現在できている道の駅の店舗展開も、さんばち市場とよんよん市場、水々しい市場という3つの形態になっていて、さんばち市場は国道381号沿いの物産、よんよん市場は国道441号沿いの物産、水々しい市場が地元産品を置く形態にしていますので、中村地域からの商品も昨日見ると相当来ていました。そういった物も一緒に展開していきますので、アンテナショップに中村地域の方もいっしょに行ってもらったらすごく良いと思います。

(委員長)

サテライトショップとか域外に商品をというときに、高知のまるごと高知の場合もそうでしたが、アンテナショップの一つの機能というのは、「市場のニーズをしっかりと地元側に反映をして行く」、ここが一つポイントになってくると思います。もちろん良い物を作られて、市場として販路を開拓し展開をして行く方向は、当然求めて行かなければならないですが、一方で市場のニーズをより飛動的に地元還元して行くことによって、市場が何を求めているかをしっかりと地元伝えるという役割も重要だと思います。

まるごと高知の場合はそれを定着させるために、ときどき、特に一年目は積極的にやってもらったのが、報告会を地元で開催する。それで、結局実際その商品の売れ筋であるとか販売員の方が直接消費者の方に聞き取りをした結果での、特に課題などを地元で報告する。是

非そういったところも意識をしていただいたらよろしいのではないのでしょうか。

(G委員)

農業、観光など色々ありますが、いち早く何事もしようと思ったら、今四万十市で雇われている臨時職員の方を、半分くらいは県外に送って、そして県外から半分の人に来てもらう。そうしたら、四万十市の者が例えば大阪や東京にできるというような雇用もできるし、販売ルートがその役所にもできるのではないか。やはり同じ1年間のお金を使うのに有効な使い方をしてみてもと思います。

農業については、地域ごとで10種類なら10種類の物を作るのではなく、2種類くらいの物を作れば、その地域の知恵が2つの品物に全部集中しますので、すごく良い物ができると思います。今は、値段もありますが最終的には味だと思っています。食べて良かったとか安心感があるということが必ず左右してくると思いますので、少し視点を変えるような考え方も必要ではないかと思っています。

林業については、非常に今材木が出ていますが、若い人はハウスメーカーを使っていることが多だだと思います。今、日本の材を使って建築する大工さんが非常に少ない。西土佐だけでも20歳くらいの大工さんが全くいない。そういうことを育てること自体難しいですが、建築をやられている方が日本建築の良さをもう少しアピールして、四万十市も補助金を出せる精一杯のことをして地元の材を使う方法にすれば、林業も運営ができると思います。

商工業では、私は、鹿児島へ近畿大学のナマズの養殖場へ行ってきました。ナマズを食べてきたのですが非常においしい。日本のウナギの3割は鹿児島県の養殖ですが、その養殖業者の1社だけがナマズの養殖を近大と連携してやっています。非常にウナギと同じ位のちからのある味をしています。今後、若い人が川に行って魚を獲ることができるか考えると、養殖業が活きるのではないかと思っています。

それから観光業ですが、都会的な感覚で四万十市を見たときに何が足りないか聞くには、先ほど言った臨時職員を都会から雇えば、ここを見たときにここが足りないというような意見がもらえ、例えば昔ながらのトイレだったら都会の人は全く来ないというのが、地域にいる者では気づかない。ちょっとしたことですがそういう視点で指導とか意見をいただくことにも繋るので、そういう点も検討してみたらと思います。

(委員長)

全般にご意見をいただきました。アクションプランか進捗管理シートにあったと思いますが、地域おこし協力隊のことが書いてあります。地域おこし協力隊も基本域外から具体的にこういう業務を担っていただける方、主に20~30代の方が対象になりますが、ご存知のとおり概ね3年で定着していただくことを目的にしています。日本全国の平均で大体定着率が60%ですから、逆に言えば40%は外の出ているということを通じて若者の循環というか、いろいろな流動性が高まっているということもありますので、今のような若者の地域内外での活発な交流がファンづくりに資するような形でお考えいただきたいということ。

それから農業に関して、例えば県の産業振興計画においても次年度以降拡大再生産というのがキーワードになっていて、その中で地域産業クラスターづくりをしっかりと進めて行くという話があります。これは、一次産業の米を作っておられる農家がいたとして、そこから最

最終的に加工・流通・販売までを、よく6次産業化と言いますが、加工も含めてトータルで「クラスター」これはふどうの房のように連なって行くような集合体にしていきたい。それを県としてもどんどん作るように考えて行こうという話があります。ますます販路が広がって行き、市場が大きくなっていけば生産体制をどうしていくかはまだ話題になりませんが、最初に私が申し上げたように、そうなるかという話にも繋がっていきますが、そこを含めて県も今後しっかり地域にアドバイスと様々な支援ができると思います。そこと市とが一体感を持てば、今のご意見が十分に反映できるのではないかと思います。

それから商工のナマズの養殖に関しても、実は県で水産業の重点化が、内水面漁業というか養殖もかなり重点に入れています。魚種は、今はマグロですけども、今後マグロに限定しないことになっていくと思います。土佐市では、かなり変わった魚の養殖を産業的に取り組んでいる動きがあります。そういうことも含めて、ナマズが例として出ましたが、県も養殖について、更には定置網とかそういったところにも多分繋がるだろうと思いますが、ご意見いただいた部分はしっかり考えて行きますので、是非その話を連動していただければと思います。

それから、ご専門の建築の部分に関しては、これはいかがでしょうか、こう意識をすることになりますよね。

(事務局)

市産材を使った建築というのは当然市としても推進しています。一つは公共建築に積極的に使うこと、もう一つは民間の住宅に対して市産材を一定割合以上使っていただければ、それに対して補助金を交付するという2本立ての施策です。

あと、四万十市産ヒノキの家を造って、そこをひとつの見学モデルハウスとして建築に対しての啓発も行っております。

中々一気に進むことにはなりません、ヒノキの資源量の豊富な本市で、ヒノキの家であるとか日本建築の家が実際に建っているのを見せるということが一番重要であろうと思いますので、公共建築が手っ取り早い、保育所等を木造で積極的に建築し見ていただく、使っていただくということも進めて行こうと思っております。

(A委員)

以前、産振計画でも言いましたが、地産地消と言って農作物はやるけれど、市の職員は中村の業者に一回も家を建てさせない。中村の業者も使って建築してもらうことを執行部に言ったら、それは執行部ではできないと言われた。それは少し話がおかしいと思うんですけど。手っ取り早いのはこれですよ。

(委員長)

すごく貴重なご意見をいただきました。実際に市の職員の数は四万十市の中でも多分組織で見れば一番多いと思いますが、色々なものをまず「隗より始めよ」ということで徹底して行くことによって全体に与える影響というのはプラスとして大きいだろうという、これはもう住宅以外の部分も当然ですよ。

横道にそれますが、この間、県の産業振興計画のときに、子育て環境が話題になったので、委員長の立場なんですけど、知事に提案しました。それは、合計特殊出生率をこれぐらいに上げていくのだとか色々言っているけれど、県庁の職員は実際、例えば30歳の女性で婚姻率、

有配偶者率がどれくらいで、その方は何人の子どもを生まれて育てていますか。それを掛け合わせると数字が出てくるのですが、実はダントツ経営で有名な小松製作所の坂根会長がそれをずっと国の委員会で言うておられます。あそこは東京と石川県にも本部があって、石川と東京で30歳までの社員の婚姻率と出生率を数字で上げて、それを掛け合わせると、石川県の方が4倍多いという数字が出てきたのです。ということは、東京で仕事するよりも石川県で仕事をしたほうが子育て環境も良いし、人口の問題が今非常にクローズアップされていますが、こちらのほうが健全なのではないかということを示しているのです。だから、高知県庁としてもその数字を出したらどうですかという話をしたら、はぐらかされましたけれど。要は市から変えていくうねりを是非起こしていただきたい。それは、色々な面で可能ではないかというご意見と理解をしました。

いろんなプライバシーにさっきの問題なんかは関わるかも知れませんが、一番問題なのは、今後人材・人手不足になって、市の職員も今からどうやって確保するかということもあり、取り組み全体に共感してもらわないと、今後将来を担っていく四万十市職員としても優位な方を確保できなくなっていく。これはもう組織論として非常に重要なポイントだということです。ちょっと横にそれでしたが、そういう意見をいただきました。

#### (F委員)

実は20年くらい前に、プリンスホテルで地域産品の色々な料理を楽しむというのがあって、西土佐からはナマズのありとあらゆる料理を出しました。今度道の駅でも串カツを出します。でも、使い方によっては枯渇すると思います。なぜかという、今はハエ縄をすれば間違っただけでナマズが掛かりますが、これをどんどん使うとエビの二の舞だと思えます。相当前からエビの筒を減そうという試みはありながらも、中々それができない現状にあります。ナマズはおいしいし栄養価が高く、色々な料理に使えるのでどんどん使うと後が無くなる。自然な物の一番怖いところはそこです。危険管理がきちっとできれば、産品化ができると思えます。そのひとつが先ほど言われた養殖業だと思えますが、振興計画の中には先を見据えた計画が必要だと思います。今年は猪が獲れず、ジビエといっても猪がいません。

#### (G委員)

先日行って来たところで話も聞いてきたのですが、廃校を使って体育館にカンコを置いて水を入れ、30℃の温室を作り飼育する。そこから出た水を利用してグラウンドで野菜を作る。

#### (委員長)

全体の循環のシステムですね。フグの養殖でもこれをうまく使って先進事例が結構ありますが、いずれにせよ色々可能性のある資源については、先に産業化できれば多分競争優位になると思えますので、そういうイノベーションを起こしていけるような手を打って行く、投資的に打って行くということも必要ですし、そういうリーダーがいらっしゃるということで今後は是非また考えていただきたいと思えます。

#### (H委員)

42ページの28年度の取り組みの前、27年度の取り組み状況のところ、先行型交付金で、旅館組合が塩たたきとか2次交通とか色々やったのですが、助成金がなくなったらやめると

いうことはしないようにと、28年度も自腹とか旅館組合の予算を使って、割引率などは縮小してそのまま続ける予定です。その中でも塩たたき券がほぼ計画どおり2,500枚出て、単品の塩たたきという形でインパクトがあって、お客様の評価も良かったので、塩たたきで町を売りたかったら、本当はもう一年くらい続けてほしい。こういう助成金を受けると、同じものはいけないなど縛りがあるので、何とか組合の費用の中でできることはしようと思っています。それから2次交通も、今度から12月以外年間通じて走っていただくことになっています。今年こそより良い形になるので続けてやりたいのですが、もう少し良いものは継続できるような仕組みがないのかと。どれも負担を組合とか宿泊施設がしてでもやっていますが、どうしても特典の率が下がって魅力が欠けるので、本当は継続してほしいと思います。

それと2次交通のことで、西土佐の道の駅「よって西土佐」にバスが寄って、滞留して、2番目のバスも2時間か3時間後には来る。帰りに乗って行くように西土佐の道の駅に連動するよう敢えて作ったのですが、物販などいろんなことを前面に出されているようですが、観光の案内機能はどれくらい考えているのかなと。というのは、381号沿いの十和や大正の道の駅の次に出来て、特に十和の道の駅はすごい発信力があり、物販でやっている。でもどちらかという観光的な視点がない施設なのです。それで後で立ち上がったとなったらどこか魅力あるもの。四万十川沿いの441号沿いにある「よって西土佐」だからこそその価値があって、そこで観光案内で中村の方にもってくるような仕組みというか、物販以外にもう少し観光案内に基点をおいてほしいと観光業者としては思うところです。

(事務局)

まず道の駅の観光機能の中で、来年度広域観光協議会で予定しているのは、道の駅に「デジタルサイネージ」、電子看板を設置して、そこで例えば宿泊情報や観光情報もデジタルとして取れる、そういう機能の施設を設置する予定としています。実際の人員の観光案内については、それぞれのよって西土佐の職員が行いますが、道の駅の事業の中でおもてなし研修などを行う予定と聞いていますので、そういった案内機能も徐々に育って行くと思います。

それと、来年度の宿泊セットプランやそれに対する支援のことであります。市としましては産業振興の総合補助金を用意しております。これは単年度の要綱にはしておりません。当面、最大3箇年までは継続できる形にしておりますので、ご相談いただければと思います。

(委員長)

解決してよかったです。特に国の地方創生の交付金に関しては、上乘せであったり、加速化だったり、新型だったり、もうある意味突発的に出てそれをしっかり取りに行く。その後のことは国も何も考えていませんから、継続性をどう担保するかは、その予算を獲得したので、自助努力というか地域負担分を市としても或いは民間の方々もいっしょに、呼び水は入ったということで考えないといけないのでしょうかね。あとさっきの観光案内に関しては、この中にもインバウンドの話があって、やはり今後日本人の数は減って行きますので、どうしても市場としてはインバウンド外国人観光客をいかに呼び込んでくるか。ここはもう本当に他人事ではないですね。実は先週、私もタイから18人お招きして3泊、南国市でやったのですが、もう1回以上来ている人たちは、非常に東京とか京都とかそういうところに飽きていて、高知が初めての方がほとんどで本当に喜んでいました。それで終わってレンタカーを借りてどこに行くとか、そこまでいっています。ですから四国全体で動線をどう考えて

いくつかはトータルでやらないと、もう一箇所だけでは成立しませんし、外国人観光客はもう次のステージに入っています。そういう視点でさっきの外部の人の意見が大事であるということは、日本人だけではなくて外国人の意見も外部の人として積極的に取り入れて、今四万十市の観光に何が足りないとか、そこは徹底的にやっておかないと次に繋がらないのではないのでしょうか。

(F委員)

「土佐の小京都中村」、この間すごい歴史を教えてくださいまして、この歴史をもっとPRしたらいいのにとおもいます。合併した当時は、小京都で全国の小京都を巡るツアーに行ったり、小京都を何とかしたいと皆さん言っていました、そのときは小京都というものが私の中にそんなに無く、どうしてそれほど思いました。間違っただけの歴史を私は知っていたもので、それだけの歴史の重さを感じていませんでした。その繋がれてきた歴史を聞いたときに、あーもったいないなと思ったのです。この観光の中でも土佐の小京都のPRの分が入って来ないのですよね。皆さんには想いがあるのでしょうか、それが表面に出ていない気がします。これほどの歴史的な一条教房公、そういったものをもう少しPRしたら、今は観光の視点が変わって来ているので、人はそういう想いのところに来ると思います。インバウンドもそんな歴史を感じられるところであれば、違うのではないかと思います。玉姫様とか、もっとPRの補助金なども産業振興でやったら良いと思います。今度歴史を使った観光PRもしていくそうなのですが、振興計画の中に入っていないと思ったことでした。

(委員長)

意外に地元の人が知らないということが良くある話で、今のお話をお聞きして感じるのは、まず会議を始めようというときに四万十市の方がどれくらいの割合で教房公のことをご存知なのか、或いはその周辺の歴史ですね。私も長宗我部国親公とか、長宗我部一族の話からこの幡多の歴史的意味が極めて魅力的というのを少し学んだのですが、どれくらい地域の方が教房公から国親公、その後幕末に繋がる歴史をご存知なのか。良くローカルアイデンティティーという言葉を使いますが、地域の誇りをどれだけ理解しているかに尽きます。

結局、観光もおもてなしをするときに地域の方々がどれだけ地域を愛しているかによって、外から来られる方の満足度は変わってきます。専門的にサービスマーケティングの考え方で、外に対して四万十市の魅力をどう訴求して行こうかと言っています。これは良くエクステルナルマーケティングと言うのですが、もう一方で地域内の方が地域をどれだけ満足し、魅力的に感じているか。インターナルマーケティング。そのインターナルマーケティングの強さによって外から来る方の満足度は変わっていく。典型的な例は、前にもお話しましたが、オリエンタルランドですね。これは従業員がディズニーランドとかシーとかをこよなく愛していることで、レジャーランドが成り立っていますが、まさにそれと同じ精神です。

(B委員)

先ほどの話になるので申し訳ないですが、川エビの関係で実はそれぞれに手は打っています。あまり皆さんに発言する機会が無かったもので具体的なことは言わなかったのですが、カゴの数量等については、自主規制をしています。原因についても、私なりに調べたのです

が、昔から漁業をする人から柚子などの農薬が悪いのではないかという話も聞きました。それと、私の昔からの経験で考えるには、40～50年前ですか、川の境には大きな石がいっぱいありました。今はそれが皆無の状態です。これはなぜかと言いますと、支流では、私のところは藤ノ川と言うのですが、国有林が3分の1くらいを占めていて、皆伐しましたので土石が流れるのを防止するために相当大きい堰堤を造っています。それが何十基もあります。それは目黒川、黒尊川もいっしょで、そこで土石がとまって、川が痩せてしまったのです。災害のときに見てもらったら分かりますが、大きな石と砂と混じったら、その石を動かすくらい力があるのです。それで土石が流れてきて川の中にエビなどの棲み処があるのです。その棲み処が、今、多分相当少なくなっています。それと併せて今の近代化の建設というか周りが全てブロックになっていて、高いところまでそのような施設なので、大增水のときには下田まで流れるような状態になります。そういういろんな面が考えられまして、是非研究してもらったら色々対策できるのではないかと。今、地元の方では、堰堤を年間1mくらいでも構わないから一度下げて、また必要になったら上げたかどうかというような話も出ています。以前、仁淀川の奥の津野町でしたか行かせてもらいましたが、そこは堰堤を空洞にして、真ん中は水が抜かれて、もし大きな水なら止めるような策もしています。そういったことも含めてお願いしたいです。

それと、実は農業もしております。農薬の面でも心配しますので、私個人では農薬を皆無の状態でも稲も作っています。自分だけが食べられたら良いと思っていますが、営農組合で預かって作業もしていますので、そこはちょっと考えないといけない。いろんな面で考えていきますけど、皆さんの意見がどうかと思い話をさせていただきました。

(D委員)

今おっしゃるとおりで、恐らくその砂で岩と岩の間の隙間が埋まってしまうといった環境的なことも当然ありますし、それから例えばミシシッピーアカウミガメとかブラックバスとかみたいな外来生物によってエビが食べられてしまうことも多々あることで、様々な要因が重なって、当然獲りすぎもあるでしょうし、恐らく原因究明には多大な時間が掛かると思います。そう考えますとやはり地域の方々でできることから何かやっていくというのも、ひとつ重要なことじゃないかと思えます。そうするとこの中で資源回復の取り組みはありますから、そのひとつとしてモデル的に環境を整えるところを作ってみて、みんなで観察していこうというのも良いのではないかと思います。その辺を是非この中で検討していったらと思うところです。

(委員長)

まず始めるということですよ。スジアオノリの話があり、鮎の話があり、そして川エビの話があって、やはりそれぞれが独立しているものでは多分なくて、全体繋がっていて環境保全すべてが循環しあっているもので、非常に大きな問題であると同時に、地域づくりをどうするという根幹の部分まで話は及ぶのかなと思います。ですから今、具体的に自主規制の話も初めて伺いましたが、まずやっておられるということからすれば、そういう動きを発信していただくことによって、当事者意識が周りに波及していく可能性もあると思います。是非、今日のこの議論を次に繋げて行くことを市もいっしょになってお考えをいただきたいと思えます。

(委員長)

今日は、いつもに増して活発なご議論をいただきましてありがとうございます。今日前段で加速化交付金のお話があったのですが、市は何もおっしゃらなかったのですが、私からコメントをさせていただくと、多分市長のご判断で産業振興計画を四万十市として検討し始めたのがもう3年に及ぶのですかね。これは国の地方創生のうねりが起こる前からということになります。そこでしっかり議論して、当時は振り返ってみるとまずは動かしてみましようということで、今日実際にどういうプレーヤーがそこに関わるのかというのが徐々に具体的にあって、まず動きながらということが実現しつつありますが、それにも増して、そうやって準備をし始めたので、こういう加速化交付金を上限いっぱい8千万円という金額で獲得できたことに繋がっていると思います。他のところは突貫工事で、その交付金をどうやったらもらえるかというのが目的になっていましたけれども、どういう目的に対してその交付金が合致するのか、いわゆる手段としてきちんと議論していったことの成果であり、私はこの流れを高く評価したいと思います。まずはそうやって国にも交付金を通じて支援をしていただいているわけですから、より市の予算としては、それ以外の部分にまた生きた予算として充当できるだろうと考えられます。こうやって更に議論の場も回を重ねるごとに実質化し、より本音の意見が多数聞かれるようになっていきますので、この流れを四万十市さんとしては是非追い風にして、更に皆さんの思いを実現できるようにいっそう取り組んでいただき、28年度4月から頑張っていたきたいと思うしだいです。

### 3 その他

(委員長)

それでは、ここまでで議論を終了させていただいて、最後その他ですけど、何か事務局からございますか。

(事務局)

本日はどうもありがとうございました。事務局からのご連絡としまして、当フォローアップ委員会ですが、毎年続けて行く予定です。28年度は上半期の状況をにらみながら、上半期の段階で皆様にご案内差し上げますので、よろしくご依頼申し上げます。

### 4 閉会

(委員長)

それでは長時間にわたりまして、ご議論いただきましたこと、心より感謝申し上げます。これで27年度のフォローアップ委員会を終了させていただきます。

また、次年度に向けて皆さん担い手としてよろしくご支援のほどご依頼申し上げます。どうもありがとうございました。